



# 周りは敵？それとも味方？

「この教室でみんなと一緒に学べる 4 年生の日々は、あと 41 日間で終わります。」

昨日の帰りの会で、サム先生が話してくれました。

1 年間の登校日数は、およそ 200 日。

その内の 160 日以上が終わり、残りは約 40 日となりました。

「クラスのメンバーは 5 年生になっても変わらないかもしれないけど、たぶん先生は変わる。つまり、この教室でこうやって勉強できるのはあと少し。だから、毎日を大切に過ごそうね。」

そんな風にサム先生が話してくれたあと、子どもたちは少し神妙な顔つきになったり、「先生が変わるの嫌だなあ」と思わず漏らす子がいたり、「でも、残り 40 日思い切り楽しもう！」と切り替える子がいたり様々でした。

よく、3 学期は、次の学年の 0 学期とも言われます。

そういう見方では、現在は「5 年生の 0 学期」とも見る事ができるわけですね。

高学年の仲間入りを目前に控え、来年度の準備にも入りつつある子どもたちがいる状況を踏まえ、今回の通信では「少し背伸びした」内容をお届けします。

そういえば、最近 Venture Fourth には他の学年のお家の方からも感想が届くようになりました。

「毎号楽しく読ませてもらっています。」

「とっても勉強になって子育てにも生かしています。」

との声を、メッセージや直接お会いした時にかけて下さる方も非常に増えて

きました。

学年の垣根を越えて読んでいただいていることも踏まえ、今回は私が以前に書いた「6年生向けの通信」を紹介します。

2019年度6年3組学級通信「花は咲く」第620号より

「周りの人は敵である。」

この言葉を聞いてどう思いますか？

賛成でしょうか。

反対でしょうか。

恐らく諸手を挙げて賛成！という人はほとんどいないでしょう。

でも、本音と建前が違うことは往々にしてあります。

考えと行いも必ずしも一致するわけではありません。

そこで、簡単なテストをしてみましょう。

次の項目を読んでみて下さい。

①自分が悪口を言われる立場になりたくないから誰かの悪口を言い、自分の立場を守ることがある。

（『ねえねえあの人って〇〇だよ。』『うんうん、分かる分かる。』）

②他人の成功（好成绩・高評価・称賛）を心から喜べない。

（なんでアイツばかり…自分だって頑張ってるのに…）

③自分の不幸（望ましくない出来事・境遇）を人に話して、同情をかうことがある。（『私さあ、～～なことがあったんだよね。最悪。』『え～大丈夫？』）

④いわゆる「勝ち組」に入ると安心する。

（アイツに比べて自分は〇〇があるから大丈夫。よかったよかった。）

⑤人と比べて自分ができないことに劣等感を覚える。

（自分なんて〇〇さんに比べて全然ダメだ…）

⑥自分の負けや失敗を素直に認めることができない。

（自分は失敗なんかしない。だから周りの人や環境が悪い。）

⑦心の中で自分は人よりも「意識が高い」「よくできる」と思っている。

（アイツは意識（能力）が低くて困る。自分の方がずっとマシだ。）

これらの項目は、アドラー心理学を参考にして作成しました。

名著『嫌われる勇気』にも同様の内容がいくつも載っています。

さて、全部で7つの項目。

自分に割と当てはまるなあと考えたものは、いくつあったでしょうか。  
大体当てはまる、ほとんど当てはまるという人は、間違いなく周りの人を「敵」だと認識しています。

そんなことはない！

大切な仲間だと思っている！

そのように憤慨する人がいるかもしれませんが、少し落ち着いて次の文章を読んでみて下さい。

まず、一番大事なことを書きます。

人生は、競争ではありません。

もう一度書きます。

人生は、競争ではありません。

しかし、多くの人はそのように認識していません。

縦関係、上下の関係ととらえている人が多くいます。

「自分はいい大学を出ているからアイツよりは上だ。」

「〇〇もあるし□□もあるから、あの人よりはマシ。」

「自分は△△ができないから、あの人より劣っている。」

人より上が安心。

人より下は恐怖。

周りの人に対して、優越感を感じたり劣等感を感じたりしていると、次第に周りの人は、自分にとって「勝たなければいけない存在」になります。

「負けてはいけない存在」になります。

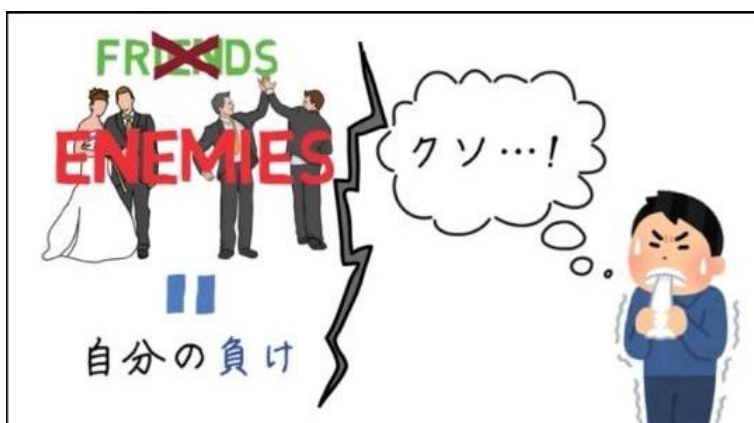
つまり、競争する相手です。

一言で言えば、「敵」です。

よく、人の幸せを素直に喜べない人がいます。

それは、人の成功＝自分の負けだと思ってしまうからです。

図に表すと、こんな感じ。



こうした関係は、「みんな仲間だよ」「我々はチームだ」など、どれだけ綺麗な言葉を並べていたとしても、本質は「敵」です。

競争は、常に勝者と敗者を作ります。

そして、他者に対する劣等感や優越感を生み出します。

対人関係は、どんどん難しくなっていきます。

何せ、周りが敵だらけなのですから。

仮に、こうした敵だらけの状況の中で自分だけが成功したとしましょう。

訪れるのは、幸せではないですよ。

訪れるのは、孤独です。

誰かを蹴落とし続け、誰かに勝ち続けて、大金を手に入れた人を思い浮かべるとイメージがつきやすいかもしれません。

しかし、「他者に勝ちたい」と思うからこそ成長するのではないかと考える人もいますでしょう。

「できない」からこそ、「苦手」だからこそ、何とかしたいと思える場合も当然あります。

確かに、上を目指したいと思う気持ちは、大きなエネルギーになります。

それについても、アドラーはきちんと指摘しています。

健全な劣等感とは『他者』との比較ではなく

『理想の自分』との比較から生まれるものだ

比べるべき相手は、他者ではなく理想の自分です。

周りの誰かとの比較ではなく、過去の自分をふり返し、理想の自分を思い描いて現在と比較することで、健全な成長のエネルギーが湧いてきます。

周りの人は、「倒すべき競争相手」ではありません。

周りの人は、「一緒に頑張っている仲間」なのです。

勉強だって仕事だって同じです。大人も子どもも同じです。

みんな頑張っています。ちょっとでも良くなろうと努力しています。

もちろん目指すゴールや、歩む速度は違うでしょう。

そもそも人間がみな違うのですから、それは違って当たり前です。

得意なことは、みんな違います。

苦手なことも、みんな違います。

顔の形も体の大きさも、みんな違います。

その中で、みんな生きるために、前に進むために、がんばっています。

もう一度書きます。

周りの人は、倒すべき競争相手ではありません。

周りの人は、一緒に頑張っている仲間です。

これに気づくと、世界の見え方は大きく変わります。

他者が信頼できる仲間になった時。

一番変わることは、その仲間に貢献したいという思いが芽生えることです。これを利他の精神とも言います。

誰かのために。

人のために。

まさに6年生で今増え続けている行動がこれです。

チームの中に、コミュニティの中に居場所が出来ること。

そして、その中で自分が人に貢献したいと思い、貢献できていると感じるようになること。

こうすることで、自分の価値が実感できるようになり、それこそが真の幸せであるとアドラーは言っています。

周りの人は、倒すべき敵ではなく、共に力を合わせる仲間。

このように感じ、行動できる感覚のことを、「共同体感覚」といいます。

共同体感覚を持てるか否かは、人生の大きな分かれ道です。

だからこそ、この感覚を君たちにもぜひ感じて、身につけてもらいたいと願っています。

先週。

事故による脊髄損傷で、首から下が動かなくなった松原さんのお話を伺いました。

仲間と楽しく語らう「居場所」のお話をしていました。

誰かのために役立つ「仕事」のお話もしていました。

そして、どんな経験も大人になった時一つも無駄にならないから、好きなことを見つけて一生懸命取り組んでほしいというお話もして下さいました。

「今、とっても幸せなんだ。」

「できないことはたくさんある。でも、みんなが助けてくれるから大丈夫。」

「毎日が本当に楽しい。」

そう笑顔で話されていた松原さんの姿から、きっとみんなも理屈ではない人生の学びを得たことと思います。

感想や質問の中に、次のことを書いている子がたくさんいました。

幸せとは、一体何か

永遠のテーマのようにも思うかもしれませんが、みんなの周りには素晴らしい先生がたくさんいます。

松原さんがそうです。アドラーもそうです。ぜひ、みんなもそれぞれに「幸せに生きる」とは一体何かを考えていきましょう。

一緒に過ごしたり、話したり、メッセージのやり取りをしたりしていると、「この方は共同体感覚を既に持っている人なんだな」

ということが分かったり、

「この方は周りを完全に敵として見ながら生きているんだな」

ということが分かったりします。

これは、子どもだけに限った話ではもちろんありません。

正直なところ、わたしは「周りを敵」として見ている方と付き合うのは好きではありません。ハッキリ言うと苦手です。

「とにかく認められたい」

「誰かに負けるのは嫌」

「少しでも人より上でいたい」

こういう人と過ごしている時に息が詰まるのは、大人だけではなく子供でも分かる感覚です。

そして、思春期が近づいてくるこの年頃に近づくと、よりその問題が切実さをもってくるようになります。

思春期の特徴の一つに、「周りの目が気になる」というものがあります。

他者からどう見られているかを気にするようになるのは、健全な成長過程の一つでもあるということですね。

でも、その「他者の目を気にする」というものが行き過ぎてしまって、周りを敵のように見てしまったり、勝ったり上回らなければならない存在のようにとらえてしまうと、人生は苦しくなるのだということをアドラーさんが教えてくれているのです。

今日が終われば残り 39 日で 4 年生としての生活が終わります。

5 年生 0 学期のみんなが、この内容をどのように受け止めたのか、また教室で尋ねてみようと思います。

☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcipcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

